

1 湘南ポモロンレッドとは

(1) 育種目標と育成経過

湘南ポモロンレッドの育種目標は生食・加熱調理兼用で、果実形が長円筒形で外観で差別化できる品種である。1995年に心止まり性のローマ型系統に‘愛知ファースト’を交雑し、果色、長果形及び非心止まり性で個体選抜し、自殖してローマ型で濃桃色果実のF₃系統を得た。これに‘瑞栄’を交雑して後代を選抜、固定化して種子親系統のF₁₀系統(23BZ)を育成した。一方、花粉親系統には、1986年に非心止まり性のポテトリーフ型品種を選抜した中玉系統に‘愛知ファースト’を交雑し、さらに‘ハウス桃太郎’と交雑し、後代を選抜、固定化し、2008年にF₈系統(Fight3/4A)を得た。この両系統の交雑F₁が‘湘南ポモロン・レッド(SPL 25R)’である。さらに生食での食味や尻腐れ果の改善を目的に、2014年からFight3/4Aに‘桃太郎ファイト’を戻し交雑し、選抜、固定化したF₁₁系統(Fight7/8)が得られ、これと種子親(23BZ)の交雑F₁品種が‘湘南ポモロンレッド 35R’であり、2019年11月27日に品種登録申請を行った(出願番号34354号)。

(2) ‘湘南ポモロンレッド 35R’の特徴

生食・加熱調理兼用の品種で、果実は長円筒形(イタリアンタイプ)、果色は濃桃色、非心止まり性で葉はコンパクトである。着果数は5~6個/果房、1果重は50~80gである。「SPL 25R」に比べて丸みを帯びた果形で、果頂部の尖りがやや小さく、食味がよく、尻腐れ果が少ない。リコペン含量(機能性成分)は「SPL 25R」と同程度で、一般的な大玉品種の約1.5倍である。トマトモザイクウイルス(ToMV)抵抗性(Tm-2a型)、萎凋病抵抗性(レース1、レース2)及び半身萎凋病抵抗性(Ve)を有する。



図1 着果状態、果実の外観及び断面

◇コラム1 「湘南ポモロン」シリーズの誕生

1990年代にイタリア料理ブームが巻き起こり、トマトは炒め物やパスタソースなど加熱料理にも積極的に利用されるようになりました。古くから欧米諸国では加熱調理に適した加工用トマト品種が利用され、日本でも「にたきこま」や「ホールファイン」などが新たに育成されました。しかしながら、日本の食生活の中では、生食用、加工用といった使い分けの習慣がないため、加工用トマト品種は広く市場に出回りませんでした。そこで、生食・加熱調理兼用というコンセプトで品種育成に取り組み、2009年に「湘南ポモロン」が誕生しました。果色は赤と黄色があり、「湘南ポモロン・レッド」と「湘南ポモロン・ゴールド」の名称で現地に導入され、いずれも品種改良により現在の「湘南ポモロンレッド 35R」と「湘南ポモロンゴールド G4」になっています。

さらに、生食で食味が良好で、果実色が茶色の品種「湘南ポモロンショコラ」(2021年12月品種登録出願)を育成しました。

